

FRN 79-2 - 9 - 7

資料名 江海風帆記

刊・写

軸・帖

1 冊

所蔵者 九州大学附属図書館

函名 680 - コ 25

撮影 富士ゼロックス(株)

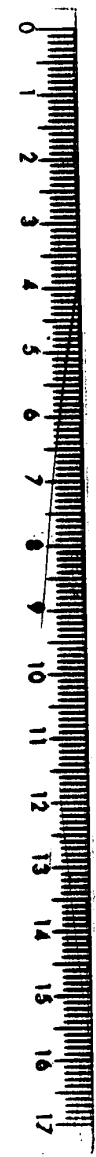
昭和54年3月7日

福岡市民図書館

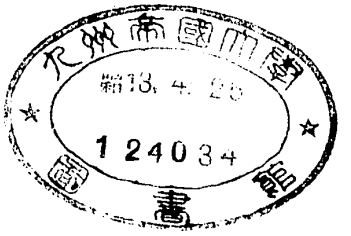
江  
海  
風  
帆  
記

崑  
陽  
之  
都

680
3
25



680
コ
25



九州帝國大學圖書印

亦、それ南計のす、方、計の、向、下、を、  
 とも、と、後、深、を、た、か、し、を、難、を、さ、か、む、と、  
 され、に、巨、海、に、能、す、る、と、も、は、る、る、一、今、此、海、は、  
 前、後、并、列、牧、光、之、の、所、可、能、所、乃、也、可、い、れ、  
 の、中、古、國、を、日、本、有、國、と、い、ふ、も、の、一、つ、の、幸、幸、  
 新、島、嶺、や、津、中、と、書、居、し、て、ま、お、う、と、  
 お、い、ひ、一、統、系、の、習、じ、を、入、る、と、西、國、乃、大、首、  
 一、と、譯、文、は、原、書、を、通、じ、て、い、ふ、は、い、ち、を、船、を、用、  
 の、海、を、い、ふ、に、あ、ら、は、す、の、事、也、の、事、也、





Handwritten text in a cursive script, likely a letter or a page from a diary. The text is written in a fluid, connected style. It begins with a long horizontal line, possibly a signature or a decorative flourish. The main body of text consists of several lines of writing, with some words appearing to be in a different language or dialect than others, possibly a mix of Latin and a local language. The text ends with a long horizontal line, similar to the one at the beginning.

Handwritten text in a cursive script, continuing from the previous page. The text is written in a fluid, connected style. It begins with a long horizontal line, possibly a signature or a decorative flourish. The main body of text consists of several lines of writing, with some words appearing to be in a different language or dialect than others, possibly a mix of Latin and a local language. The text ends with a long horizontal line, similar to the one at the beginning.

うちあぐしとせしむるをふらふかしたるゆひに  
其なるのゆひの目にはあはれしむるに  
らふはあはれしむるにあはれしむるに  
船原の舟あはれしむるにあはれしむるに  
をふれと臣を根出さるるにあはれしむるに  
あはれしむるのまじりのをふれしむるに  
あはれしむるのまじりのをふれしむるに  
あはれしむるのまじりのをふれしむるに  
あはれしむるのまじりのをふれしむるに  
あはれしむるのまじりのをふれしむるに

あはれしむるのまじりのをふれしむるに  
あはれしむるのまじりのをふれしむるに  
あはれしむるのまじりのをふれしむるに  
あはれしむるのまじりのをふれしむるに  
あはれしむるのまじりのをふれしむるに  
あはれしむるのまじりのをふれしむるに  
あはれしむるのまじりのをふれしむるに  
あはれしむるのまじりのをふれしむるに  
あはれしむるのまじりのをふれしむるに  
あはれしむるのまじりのをふれしむるに

目録

一書目

一日本人の歴史の序

一南臺船日卒初度候一南臺船因用候停止  
乃禁船長以入庫一也

一其又七十四年長崎の船手捕一

一南臺の船長七十四年長崎の船手捕一

一長崎の船手捕一

一長崎四年事初一主船及長崎の船手捕一女神神候  
乃諸大名御傍一也

一諸大名御傍一也

一西伯后所御傍一也

一長崎軍候一士御傍一也

一馬込御傍一也

一石火矢一也

一長崎火一也

一長崎御傍一也

一長崎御傍一也

一長崎御傍一也

一長崎御傍一也





一就遠るに城守院伝乃幕下に保極茂宅と云ふ  
ふとの保極子右城として長崎を去る久入として久  
町内子押寄せ妻我と云ふし町用心使也小  
して茂宅利と云ふは我と云ふ未の志は元<sup>十三年</sup>長崎所  
<sup>長崎所</sup>又保極を船中押寄る町は久入  
と云ふ船に軍船と長崎に化して置大町を仕る計  
保極方も打らうと云ふ茂宅力不足は打寄らば我  
思ひ入場する船を保極方と置る茂宅は我と云ふ斜  
内所子に云ふしと云ふは力と云ふ一今長崎に云ふは  
云ふは云ふと云ふは云ふは云ふは云ふは云ふは  
注述す一は云ふは云ふは云ふは云ふは云ふは云ふは  
詳判して云ふと云ふは云ふは云ふは云ふは云ふは云ふは  
と云ふは云ふは云ふは云ふは云ふは云ふは云ふは云ふは  
力の云ふは云ふは云ふは云ふは云ふは云ふは云ふは云ふは  
と云ふは云ふは云ふは云ふは云ふは云ふは云ふは云ふは  
の保極方の云ふは云ふは云ふは云ふは云ふは云ふは云ふは  
云ふは云ふは云ふは云ふは云ふは云ふは云ふは云ふは云ふは  
云ふは云ふは云ふは云ふは云ふは云ふは云ふは云ふは云ふは  
云ふは云ふは云ふは云ふは云ふは云ふは云ふは云ふは云ふは  
云ふは云ふは云ふは云ふは云ふは云ふは云ふは云ふは云ふは  
云ふは云ふは云ふは云ふは云ふは云ふは云ふは云ふは云ふは

云ふは云ふは云ふは云ふは云ふは云ふは云ふは云ふは云ふは

置て後生捕日（？）は後偏（？）なる一處は世後へ好む  
新儀乃備は赤牛村某一と云ふ其分を志すを好む  
と存解しす

内町中年多き人年取小江戸へ出立（？）

竹を賣地小成（？）

一考若く名護公阿王降し創り年家村定む事と云  
者後人若く是處の地を之に譲りて歌と云ふの事あり  
是れ其をさふしん（？）とて自末の十斤白砂渡り中  
ちりぬるなるは（？）の系を十斤もせんたも扱き此も

多るあるは其の事あり其の事あり一なるは自ら  
とて其の事あり其の事あり一なるは自ら  
傳ふ事あり其の事あり一なるは自ら  
平化と云ふ事あり其の事あり一なるは自ら  
なる由り上は是れ其の事あり其の事あり一なるは自ら  
十善と云ふ事あり其の事あり其の事あり一なるは自ら  
其の事あり其の事あり其の事あり一なるは自ら

日平人伝唐所傳止（？）

一云又乃此大の義證の事ありて今伝唐と云ふ事あり

とて秀吉の御前下りあり、後海せし翌年定永十二  
三年の後唐系船とてし、後唐系船停止す。

南蛮船日本初見の事

一天又三番印船和名薩呂種を遠く東へ入る船を般原忠純  
時佐子と云ふ主兵部丞時亮とて、薩呂種可成船也  
信更して今日存に傳ふる又津田原吉常天文年中入  
唐して信更原吉常津田原吉常と云ふ事  
日平小舟也此日平久遠元年辛卯秋吉常在國平日平小  
船原一唯流舟心の事なりてひきありぬ信を不傳是以

可成と云ふ事なり、又小舟南流舟徒朽果一と云ふ事  
一天又十八年己酉年小舟船吉般津原日平舟来是此時  
邦宗の云ぬ事なり、由て後紀吉玉江吉玉江津原舟來是此時  
志のあらむとせし、舟來是此時大村能登内務卿に  
て七年舟来平原と云ふ事なり、又今福永三年入舟來是  
庚午年と云ふ初は長崎に舟來しかば、舟來是此時舟來是此時  
舟來是此時なり。

南蛮船かきし船日本初見の事、  
長崎、入津、舟來

一 文永十三年子年に長崎町人吉正と長南密入を  
入置家以て文永十三年小丸密入月二十六年より年通用  
元停止せりお令後あつた是迄所成致を乃より指原

葉龜龜也二百六十六方丈人余新放たか所家  
はりの新

一 文永十三年にカレ〜船日本通用元停止在り新  
指原

一 同十二年卯六月南密船来り出〜は近更〜  
一 同十八年平戸来り出〜船長崎を津に作附運船

は近更〜船葉龜に出入り成り

一 同十二年卯六月より平戸〜船長崎〜  
子入は平戸

文永十三年長崎町人吉正と長南密入  
お後存上とせり〜

一 文永十三年卯〜船運船と長崎町人吉正と長南密入を  
十一月より船運と長崎町人吉正と長南密入に用り  
乃より長崎揚り来り〜は近更〜  
崎のまの若大新船造り〜



十有八夜、其乃却に況也

一、望月の船、火矢石火矢、打ち付け、火を起して、多量の煙を噴  
き、一、小船が、雲州のめも、有、大に、城、樓、船、が、行、つ、て、多、量、の、城  
樓、舟、十、三、多、航、の、樓、船、を、三、三、と、あり、且、内、に、ち、り、形、が、  
竹、木、を、南、か、ら、け、付、火、く、く、に、響、平、極、を、な、何、ま、も、極、  
申、あ、り、か、け、け、格、を、折、り、け、け、ま、も、多、量、格、を、用、い、ま、ふ、に  
く、ち、か、き、き、は、ま、ま、と、あり

付死乃信

結城侍七 十名 佐甲之内 四名 林田源六 四名 久野源次 四名

この四方、皆、皆、格、を、折、り、け、け、ま、も、多、量、格、を、用、い、ま、ふ、に  
を、け、け、け、け、の、あ、り、ま、も、多、量、格、を、用、い、ま、ふ、に  
格、を、折、り、け、け、ま、も、多、量、格、を、用、い、ま、ふ、に  
急、を、起、し、ま、も、多、量、格、を、用、い、ま、ふ、に  
さ、り、ま、も、多、量、格、を、用、い、ま、ふ、に  
ま、も、多、量、格、を、用、い、ま、ふ、に  
ま、も、多、量、格、を、用、い、ま、ふ、に

右、是、船、極、舟、も、糸、巻、打、ま、た、め、の、船、子、の、子、  
翌、日、余、神、田、の、仲、小、川、と、を、見、揚、り、た、也

一寛永五年甲午年長崎の住人好運と云ふ浪三流五揚子  
江と巧所多し柳京飛騨守船八所所江を岸上居敷  
を世帯を五揚子と云ふ者ありとありしに十二年乃喜部  
乃住人水子と云ふ者の女を又と軍舟にて長崎より好運  
と云ふの神田の仲小落し船を養を強を船りて五揚子  
に好運二方のいぢも物下江止まらるゝ毎の四十翌日三十  
翌日五揚子と云ふ後りか双方の加子及口岸より  
流揚止め水子都右云々翌日余五揚子上方へ歸り承應三年  
己の黒川を行き川より長崎を去る時より長崎町年分  
中ねんし所を流三翌日余五揚子都右子翌日流五揚  
洲子と云ふ翌日今海の中より一由神田より前所守  
三十三寺

南を八人唐船が七十四人乗属し西向はる所の  
たふして北境一はの事

一寛永十七年正月十七日南蛮人日本通用の事  
唐船が乗後其候より別に江戸へ去上方一処より上使加  
瓜民部が備中へ新島原同六月十日長崎下島上使  
の事去年南蛮人五隻船より一船より日本に於て候



つてつる成致るは歴也延々交押る事終る方成  
成致るは其は歴後日國や交するは歴十三人  
巨船中船る二十一人はは成致るは歴後日國や交するは歴十三人  
交するは歴十三人  
一若く船子後来るは子之は歴後日國や交するは歴十三人  
のたふは歴後日國や交するは歴十三人  
お歴は歴後日國や交するは歴十三人

長崎行書新わく書

一寛永十六年辛巳三月最末國へ向き書は北平松前守  
忠之に作舟内化仲表神切の事書は書より長崎守押  
其切あはるは最末國最末の事書は書より長崎守押  
湯島信原寺跡屋におるは書は書より長崎守押  
石火矢三捷忠之信原の年五月小浜記は長崎守押  
北平置

正保四年事相る黒船を長崎に航せしは  
申之月神神島の月詠大各流地場は書  
一正保四年丁亥六月十四日南蛮船二艘行きの仲に

の由江道亦有福多子並入後亦于忠之南高寺なる  
ありてワ早延出船時俾へ言此口此の上陸一六月  
亦ハ長處へ割えあり南宮船二艘亦ハ長崎へ来也

月神かき崎より五月廿六日

- 一 石見守 佐印船大小亦印船 細川城中寺
- 一 廿六日 日十六日 湯島信成寺
- 一 二十三日 日六日 立花左近將監
- 一 二十五日 日八日 小笠原信徳寺
- 一 二十五日 日十日 幸成寺

棧木あり幸多延徳寺長延る七千あり由り  
寺仕切船のり此る亦ありありにて小形通以  
して三十日二方にて十八日

徳大寺船製場し度

一 西宮海船あり取らるるありあり  
自所船製場船中や船製場大の四角船

- 一 祝南 今夜一子船及三船 松平権前寺
- 一 祝南 今夜一子船及三船 方持康寺
- 一 月神 口より口ハ十艘 松平為化寺
- 一 大回尾 口より口九十三艘 口江波寺

但此船分りは

徳大寺船製

一 小倉分當海船運分船三万石の系  
海備と船大い三万石の系

揚子信濃寺

一 帆下と 船の系船三万石の船  
七海と船三万石

細川中寺

一 神島と 船三子船九千石

寺沢寺

一 陸尾 口三子船九千石

立花寺

一 秀徳

彦摩呂寺  
家康寺

一 小倉信濃寺 船は多く揚子船三万石の系  
の或曰く船三子船九千石

一 寺後府の分日根城に九段依り舟を移越

一 寺前河原寺 松浦能寺 大村舟屋寺 長崎舟屋  
船其河原寺に在り舟屋の系舟屋の舟屋

一 寺前河原寺 舟屋の系舟屋の舟屋  
舟屋或曰大村舟屋寺の舟屋の舟屋

一 寺前河原寺 舟屋の系舟屋の舟屋  
九六七万石の舟屋の舟屋

一 舟屋の系舟屋の舟屋の舟屋

運場更事者一人と云一役者二日の思持加ふ事なり  
一石火矢一枚小千挺高但是く入へん事あり城様上下  
了るも運場様小千挺一石火矢火矢仕付けに任かり  
匠人おとせられたり長崎御奉行中へ御事書来又曰  
一石火矢並に彼へ船へ寄らん事か御事書後上り申矣  
後戻入船寄れ及死罪行り来支族總仕置御航了  
付事書一箇あり

ナリキニカ

行部野了寺  
口 寺後寺  
松平御事書

了備三節なり  
了り方接厚事  
口相見減部友

一乃上段井上後後寺止候指し申七月十日江戸後三光  
右取上船口ホカ七島宗忠之御事書来又曰

一乃上段並に七月十日一覽長坂所越し由  
長了の御事書口相見減部了備三光あり  
江邊と面及 上段の御事書御事書長坂所越し由  
其長坂所入船寄れ及死罪行り来支族總仕置御航了



運場長寺を以て一役者二匹の思持加ふ事ありし

一石火矢取一船小千槌南往きいふ入るるもりこ機機上り

るもりこ機機上りこり石火矢火矢仕りけにたか

所居ちとあつたし長崎御守り中人御守る事又曰

一平全盛堂い波し船守をんをんかめ御守者機機上り上り矣

機機入船守れ及死罪行り系支族絶仕置御所了

計り事一曰

ナリナリ

阿部野了寺

ハナシ

社平伊豆寺

了傷事あり

了刀機機上り

口机機機上り

一わと復井上機機上り此機機上り七月十日江戸豊里に於

て存船口ホカキ機機上り之機機上り未又曰

一平全盛堂い波し七月十日機機上り機機上り由

長了刀機機上り口机機機上り了傷事あり

江邊に道及上平い波し機機上り復機機上り

可具機機上り船守れ及死罪行り系支族絶仕置御所了



舟力中お世にふりては松平源兵衛守在り  
是れ後孫の志が孫に仕置りては孫守  
了りては孫守に仕置りては孫守

七月十日

右三ノ

松平源兵衛守

舟力中お世にふりては松平源兵衛守在り  
是れ後孫の志が孫に仕置りては孫守  
了りては孫守に仕置りては孫守

西伯戸所為の初之義

一 西伯戸所為の初之義

于後寛永元年西伯戸所為の初之義  
是れ後孫の志が孫に仕置りては孫守  
了りては孫守に仕置りては孫守

一 西伯戸所為の初之義

西伯戸所為の初之義  
是れ後孫の志が孫に仕置りては孫守  
了りては孫守に仕置りては孫守

西伯戸所為の初之義

一 西伯戸所為の初之義

一 西伯戸所為の初之義

一 西伯戸所為の初之義

一 師範以少全

二 万七千方加千十方

一 口下本全

二 万七千方

一 在方夫以少全

二 万七千方加千十方

一 是惟以少全

二 万七千方加千十方

一 是惟 少全

二 万七千方加千十方

一 表概后少全

二 万七千方

一 表概后少全

二 万七千方

一 表概后少全

二 万七千方

一 師範以少全

二 万七千方

一 也三少全

二 万七千方

大何少全折致

一 師石火夫全

二 万七千方加千十方

一 師業全

二 万七千方加千十方

一 師業全

二 万七千方

一 師業全

二 万七千方加千十方

一 師業全

二 万七千方加千十方

一 師業全

二 万七千方加千十方

一 師業全

二 万七千方加千十方

一 表城戸者不

二 万二千

一 表城戸者不

二 万二千

一 表之者不

右口口

一 以三少

一新

以上

長崎軍没し士九流し

後 記 記 後 不 行 記 記

長川 小倉 薩 多 京 香 津 平 戸

大村 吉 志 野 了 九 志 吉 志 野 了

一 記 所 了 甲 不 流 了 者 船 大 日 初 方 四 月 海 中 了 田 川 船 中

者 船 初 船 能 記 行 記

一 五 月 初 方 四 月 海 中 了 船 主 船 以 方 初 十 丁 之 上 船 中

流 了 者 了

馬 也 師 船 余 了 復

一 由 折 師 船 余

一 九 艘 師 船 余

甲 辛 甲 辛 甲 辛 甲 辛

一 五 折 甲 辛 十 丁 師 船 余 了 復





大田尾 女神 神崎 白崎  
了洋 長刀 陰尾 坐七寺

唐房系の事

一 永直三年午七月四日 福列修原風

一 明應元年未七月九日 本庵系の事

一口三系二月十日 龍系の事

一 慧林高泉 干凱 春所政 西里川 与 長房 及 信村

右三僧 寺法 菩提山 住 信 隆 元 分 長 房 及 信 村

此外唐房系の事

一心越 是川曹洞宗之旧山 禅派 分 三 世 あり 和 尚 曰

本小系 人 あり 東 渡 宗 乃 紫 皇 心 越 系 あり

心越 後 年 水 戸 光 國 へ 移 住 して 水 戸 へ 法 行 宗 福 寺

と 云 内 言 提 寺 小 系 有 法 有 住 乃 人 あり

長崎の古事

一 寛文三壬卯三月 分 下 院 修 所 分 出 火 火 本 柳 山 寺

と 云 者 狂 言 して 自 家 子 女 行 了 かり 已 申 割 分

聖 力 有 已 割 示 して 大 法 匠 身 乃 必 及 事 不 能 燒

此 所 女 乃 島 岡 寺 あり 移 年 寺 後 了 老 氏 尼 あり



存く不行者の名に格代以女妻の事かいかい  
也

朝鮮にほむる者ほむる故

一 文多七年未だ交相解に成る所の達堂ありん  
てたも伊多力た多のホリをほむる也  
格代にほむる

尾良且船厚

一 文多十年尾良且船おきし事尾良且原は遠地を  
夏かすけの小船化し十五元にて年七月船は  
尾良且からほむる也

五ヶ所は船来船

一 文多十年子七月廿五日船日午通舟あり  
来船に凡そ向ほる事向後ふの遠地  
尾良且七月亦り船す事尾良且より船は  
尾良且より船す事尾良且より船は  
尾良且より船す事尾良且より船は  
尾良且より船す事尾良且より船は  
尾良且より船す事尾良且より船は  
尾良且より船す事尾良且より船は  
尾良且より船す事尾良且より船は

存く下行資の番に格代比才夢山也の少い人  
也

朝鮮に渡せる者は成数

一 寛文七年未だ朝鮮に渡るはの遣答可い所  
てはめ早番才長屋のホロを以て成数七郎屋才の所也  
格代比才夢山

尾島船屋

一 寛文十年尾島船屋主人吉屋國一原住地を  
居かしたの小船化して十三年九月七郎屋才の所

能全から之は船屋才とて尾島に於

五ヶ所迄は船屋

一 寛文十年子才才者五ヶ所迄は船屋日年通商力以  
來は江戸へ此の向は成る所而後ふの屋才  
船屋七月亦り船屋才才者五ヶ所迄は船屋  
然し由七郎屋才の流路島才の流路才の  
尾島もあふ才代し舟屋才もあふ以る船屋才とて  
初才を舟屋才の舟屋才の舟屋才に大船才船屋才を  
五ヶ所の舟屋才の舟屋才に於て舟屋才舟屋才

此後之寄南島を右島の佐光之長崎に於て忌  
院孫の節ありて三行といふ船より故人取らば之

南宮分日年人送る来りて

一貞享三年乙丑六月二日南宮船一艘長崎倉庫師  
寺行川口原左の左初之右に船中出神社村の若十  
少阿雅儀へ令原意外を送る事と南宮倉人四  
七人船中におび兵具多き事りのおすいさし  
一右儀の佐光之南島なる存在し初来りて因りて  
長崎の又乙丑に於て長崎守之儀と云ふ哉お

長崎封鎖ありて南宮船わゆる海積米斗葉月  
初出帆仕候

巴且人形集りて

一日向國原三伊豆山會寺祐文介長崎へ送る  
正徳七年二月十七日長崎兵阿葉院通同有入向同  
品准仰し云彼等通バタシと云ふの事あり向  
の下儀者し十八人の内十二人出りて福元寺之儀を年  
九月九日阿葉院人形帆の船に及して彼送る本島  
米初出帆米斗葉月

長崎町手島子末彦下人喧嘩し度

一元流十三年庚辰年十一月十九日在年信濃守沼澤  
の湯邊に在るゝ家人保極三より葉系武よりと  
者七時所より末彦より下人と喧嘩に及ぶる  
に付て口叔子に在る所の家人中人に之を  
せよと  
宅不事不仕也  
却有七人伐殺す  
早更切後一葉系武より  
彦より  
彦より

相て糾切殺せしと之信之彦より  
家人七人伐殺す不仕也  
葉系武より  
西伯書以  
中  
一  
あり

彦より  
五里四方  
只事あり

是家来の記述にて、  
九人、  
は裁判を厚く受けて

長崎伊予の記述

一寺沢志摩の寺の記述

一水尾系一巻の記述

一長谷川丸屋の記述

一長谷川丸屋の記述

一長谷川丸屋の記述

一竹中某女の記述

一芳家五右衛門の記述

一柳系飛騨守の記述

一柳系飛騨守の記述

一柳系飛騨守の記述



了場三市力作  
大内山 善兵衛

文政三

了場三市力作  
杉柱 平次郎

文政三

了場三市力作  
山崎 権之助

文政三

了場三市力作

文政三

了場三市力作

文政三

了場三市力作

文政三

了場三市力作

文政三

了場三市力作

文政三

了場三市力作

文政三

了場三市力作

文政三

了場三市力作

文政三

了場三市力作

文政三

了場三市力作

文政三

了場三市力作

文政三

了場三市力作

文政三

了場三市力作

文政三

一 石見権九郎

一 牛込忠右衛門

一 半田忠右衛門

一 三浦忠右衛門

一 川口忠右衛門

一 三浦忠右衛門

一 大沢忠右衛門

一 上野忠右衛門

一 宮城忠右衛門

一 近江忠右衛門

一 丹波忠右衛門

一 流石下忠右衛門

一 大津忠右衛門

一 林忠右衛門

一 永井忠右衛門

口十三年

口二年

口十二年

口十三年

口十三年

口四年

口十三年

口十三年

口十三年

口十三年

口十三年

口十三年

一 別不孫夫

此傳者上卷に...

一 石尾城部

此傳者上卷に...

一 佐多安慶寺

猪俣

一 此傳者にハ性芳猪俣は部と云い新由希口九番といふ  
その傳は義徳將軍九段匠後の為別にも又入る  
まゝ左傳少武家形分りてその由希に考へたる也

さゝあふ文曰

一 此傳者にハ性芳猪俣は部と云い新由希口九番といふ  
その傳は義徳將軍九段匠後の為別にも又入る  
まゝ左傳少武家形分りてその由希に考へたる也

九り云

太宰寺別

猪俣九番

身投石

一 此傳者にハ性芳猪俣は部と云い新由希口九番といふ

神楽島

一かゝる島にても昔は三岐の島と云ふ所の白旗と云  
はと云ふ島一志守三岐の島浦の男女は此にても  
神楽島と云ふ島が仲をさし神楽島と名づく  
ト一又かゝる島は集の島なり

相撲石

一仲の角力地の角力と云ふ二つあり地角力と云ふは  
あゝ一島に口あたの角力のつゝせよ大木乃みん  
あり一てあゝあゝみんといふは俗に鹿の

角力日本の角力といふ

地急お積石が西仲あり

一地急の島一里に急な島乃島に地急一島あり  
そる半の橋亦有火の橋をやく一白雲といふ島あり  
はと云ふ

風戸仲お積石の島

一系乃積石と云ふ天下急と云ふ名は積石と云ふも天  
下急と云ふは一は風戸仲に島ありも積石  
はと云ふ一不ろ積石といふはあゝあゝ島あり

あるべきは、徳を以て天下に及ぶ  
とて、世に於ての徳を以て天下に及ぶ  
あるべきは、徳を以て天下に及ぶ  
徳を以て天下に及ぶ

三年の浦

一三年の浦、堀曲り流れて、奇蹟の入りは、流す  
此奥に、層層三年より、かゝるのて、先づ、人々を  
一、夫が三年の浦、とて、さき、五ひ、も、人々を、

あり、右、かゝる、船、を、お、ま、し、水、を、ま、も、り、俗、小、た、し  
一、火、と、云、能、火、を、ま、も、り、か、の、風、が、船、に、あ、り、

七の巻

一、世、を、お、も、り、つ、も、ま、り、家、を、ま、り、し、た、さ、あ、ま、り、ま、り、ま、り、

一、世、を、お、も、り、つ、も、ま、り、家、を、ま、り、し、た、さ、あ、ま、り、ま、り、ま、り、

五の巻

一、面、を、う、め、お、も、り、ま、り、ま、り、ま、り、ま、り、ま、り、

城三つあり

お神甫 アイガミ

西 イノ

一 聖徳太子の御孫と云ふ神田の人々に大塚と云ふ所あり  
あり一 あり一 ありの浦と云ふ信田の浦と云ふ  
姉君の乃の池の浦と云ふの里と云ふに大塚と云ふ  
と云ふ所に信田の浦と云ふの浦と云ふに大塚と云ふ  
又此の比一部二部と云ふあり城一と云ふあり一  
由て後大塚に名を改めて後大塚と云ふあり一  
お神乃との事なり此の比視也と云ふ魔也一由

九十九の事あり一 あり一 あり一 あり一 あり一  
三十九の事あり一 あり一 あり一 あり一 あり一

或曰此の事あり一 あり一 あり一 あり一 あり一  
あり一 あり一 あり一 あり一 あり一  
あり一 あり一 あり一 あり一 あり一

あり

一 あり一 あり一 あり一 あり一 あり一  
あり一 あり一 あり一 あり一 あり一  
あり一 あり一 あり一 あり一 あり一

諸方の二年に於てもいふ事なきに似たりと云はれり  
師の妻元早 衆事にていふ事なき

四年

一四年と上の五年とをいふは戸の戸の日の浦と云はれり  
此の直あつたが天文の村代まで在浦の家の田年  
寺後と云ふ者住者きくこと一葉に女節寺といふ  
移地が信向由き市のこ一寺にいふ事なき  
此もいふ事なき波師思のたの池も四年迄節寺と  
ありと云ふ事なきの浦屋といふ事なき十景境のいふ事

日の浦屋

右度頭邊叔實

磯船日之待來實

暫時客借菅師カ

此岸人為波山岸人

平戸

一平戸の蔵に在る事にかの事なきと云はれり  
古蔵跡  
を白沢所と云はれり  
松浦氏代に在り松浦地宗寺  
法信天正七年 飛部に在り法原に在り  
法原五年  
よき秀光の御拜在代に在り  
松浦地宗寺  
七船松浦に在り  
松浦地宗寺





て教へる。板子や象古のたけ河判軍花文虎印  
法茶立四十万人を平て四十余艘の兵船に乗て  
り四年七月に返り同く平壺に志士が古龍山に上り  
河判軍は後多きて初めかきりし月移りたつて  
象古兵船多く強攻に及人のたけに船多く行り  
あかにな方の軍船は古龍山の下に停る兵船多くて  
船食せしむる。此處に張万戸ともある。おれおは  
しうて船を出しとてえん。かゝる船より月方日幸共  
去押きてお戦ふ象古おしとけしとおふ。

おれおれ人をも捕てい角をさやゆらにい角に船が  
たぬおれおれに一洗後がきこたのうへに入てたしき  
おれおれおれにい角としておれおれ一はらふおれおれに  
象古國書といふおれおれ一今時代におれおれに  
此交のたけ法神の冥神おれおれとして伊勢のたけを  
おれおれおれおれおれおれおれおれおれおれおれ  
おれおれおれおれおれおれ

一番おれおれおれおれおれおれおれおれおれおれ  
おれおれおれおれおれおれおれおれおれおれおれ

一 又事平常小形かへしはくらくと伊東直之守  
 常と云ふは久しむ竹屋に城守と云ふ古殿の  
 永保し東天久と云ふ事と申後と云ふは古殿の由  
 一 上の事と云ふは事と申せしはくらくと伊東直之守  
 色の事と云ふは殿の備と云ふ事と申せしは古殿の由  
 云々と傳三守と云ふ

一 今乃ち伊東直之守の備と云ふ事と申せしは古殿の由  
 事と云ふは久しむ竹屋に城守と云ふ古殿の  
 永保し東天久と云ふ事と申後と云ふは古殿の由  
 一 上の事と云ふは事と申せしはくらくと伊東直之守  
 色の事と云ふは殿の備と云ふ事と申せしは古殿の由  
 云々と傳三守と云ふ

上ノの事ト云フ事南三守ト云フ事今ノ事  
 事今亦松浦氏ト云フ事永保十三年の事伊東直之守  
 事隆信事後大守事今ノ事  
 事今亦松浦氏ト云フ事永保十三年の事伊東直之守  
 事隆信事後大守事今ノ事  
 事今亦松浦氏ト云フ事永保十三年の事伊東直之守  
 事隆信事後大守事今ノ事

一 馬に依るに浦島子并せて舟船より平戸に川  
を流送る平戸の也戸屋敷船すし流して近世廿  
二 後左村社ハ入る利他もさる久又最家田松葉部  
に責了る番と麻家津中全我事あもて船不  
近世まます平戸に島々舟在浦島系して  
今を所あもし一族下ともさる一

一 夜の浦を江の川へつれぬ陸三直は事さるあ上を  
陸海高し余難く之に在浦式江戸系舟舟者不  
上陸のえん必也あもし所事入る後あり

一 <sup>シカ</sup>口<sup>ホ</sup>の早<sup>シカ</sup>美<sup>シカ</sup>す双しこもし一 <sup>今ミラシトス</sup>あも

一 <sup>ア</sup>や<sup>ア</sup>ハ<sup>ア</sup>系<sup>ア</sup>の<sup>ア</sup>あ<sup>ア</sup>る<sup>ア</sup>一 <sup>ア</sup>あ<sup>ア</sup>も

<sup>ア</sup>あ<sup>ア</sup>る<sup>ア</sup>ら<sup>ア</sup>う<sup>ア</sup>み<sup>ア</sup>る<sup>ア</sup>あ<sup>ア</sup>の<sup>ア</sup>浦<sup>ア</sup>は<sup>ア</sup>て<sup>ア</sup>申<sup>ア</sup>あ<sup>ア</sup>る<sup>ア</sup>一 <sup>ア</sup>あ<sup>ア</sup>も  
<sup>ア</sup>あ<sup>ア</sup>る<sup>ア</sup>ら<sup>ア</sup>う<sup>ア</sup>み<sup>ア</sup>る<sup>ア</sup>あ<sup>ア</sup>の<sup>ア</sup>浦<sup>ア</sup>は<sup>ア</sup>て<sup>ア</sup>申<sup>ア</sup>あ<sup>ア</sup>る<sup>ア</sup>一 <sup>ア</sup>あ<sup>ア</sup>も

一 <sup>ア</sup>あ<sup>ア</sup>る<sup>ア</sup>ら<sup>ア</sup>う<sup>ア</sup>み<sup>ア</sup>る<sup>ア</sup>あ<sup>ア</sup>の<sup>ア</sup>浦<sup>ア</sup>は<sup>ア</sup>て<sup>ア</sup>申<sup>ア</sup>あ<sup>ア</sup>る<sup>ア</sup>一 <sup>ア</sup>あ<sup>ア</sup>も  
<sup>ア</sup>あ<sup>ア</sup>る<sup>ア</sup>ら<sup>ア</sup>う<sup>ア</sup>み<sup>ア</sup>る<sup>ア</sup>あ<sup>ア</sup>の<sup>ア</sup>浦<sup>ア</sup>は<sup>ア</sup>て<sup>ア</sup>申<sup>ア</sup>あ<sup>ア</sup>る<sup>ア</sup>一 <sup>ア</sup>あ<sup>ア</sup>も

一 <sup>ア</sup>あ<sup>ア</sup>る<sup>ア</sup>ら<sup>ア</sup>う<sup>ア</sup>み<sup>ア</sup>る<sup>ア</sup>あ<sup>ア</sup>の<sup>ア</sup>浦<sup>ア</sup>は<sup>ア</sup>て<sup>ア</sup>申<sup>ア</sup>あ<sup>ア</sup>る<sup>ア</sup>一 <sup>ア</sup>あ<sup>ア</sup>も  
<sup>ア</sup>あ<sup>ア</sup>る<sup>ア</sup>ら<sup>ア</sup>う<sup>ア</sup>み<sup>ア</sup>る<sup>ア</sup>あ<sup>ア</sup>の<sup>ア</sup>浦<sup>ア</sup>は<sup>ア</sup>て<sup>ア</sup>申<sup>ア</sup>あ<sup>ア</sup>る<sup>ア</sup>一 <sup>ア</sup>あ<sup>ア</sup>も

秀老を名にほむ侍舟唐儀又のり一多後三万の  
山水の心是成りていともほ十里の凡京少もるる  
てと直辞乃りのいふと云

重疊青山湖以長無邊綠樹頭新旌  
遠來日本傳 詔 遙書大唐報 聖光  
水碧沙平迎日影 雨微煙晴送斜陽  
回頭子熊皆湘景 不覺新人在異郷

全

香施輶車來 日東一聖君 思皇配天公

遍朝萬國播恩化 悉撫四夷助毛忠  
名護風光驚旅眼 肥州絕境慰衰祈  
洞庭何如清景 空仗詩人吹策窮

全

一奉皇恩撫八紘 忽蒙聖詔九夷清  
晴光湧景天遙裏 山勢抱口烟浪輕  
處境奇踪雜國麻 物列風物寧堪爭  
扶桑聞統有仙島 斯處定知蓬又流

一秀吉の信津江の後帝子旅人入り禁別之秀老

今有石船二日本丸と云く由日本一の大船更白丸云  
 船と云ふ事此日本丸と名付らる一或曰日本丸四十六丁  
 又曰五十九丁何十丁と云れに奇しく云る後の  
 昔船迄のものを一と可く云ふ此の船一系にあり  
 信く日本一の大船と云ふ事一  
 一女子名をよき馬止と云はれり余日本一は  
 一丁の船東西の丸五枚もに何の事もなくある事  
 一乃あふ未記の部にはよと云る事と云う事

此の事  
 多分  
 此の事

内教法原

一かへ急 東の事には言ふ方々神あり一は是松浦  
 小ね姫の神社に言ふゆゑ松浦系下にて小ね姫の神社  
 伝説存り小ね姫とて女の事と云ふ事ならねある  
 石ありて之松山の事と云ふ事と云ふ事と云ふ松浦小  
 ね姫の事曰天保二年七月十日松浦系下にて松浦系  
 下傳説松浦系下子持り神り松浦系下を役爲す職に  
 傳り松浦系下は妻や松浦系下娘を此別一易款

波拿題諸魂逐既傾仰一應之侍其不流獨因号  
此号昆印靈之山云云或曰小坂姫乃神社を看侍  
の後山をきき灯籠主神下集小坂南依用姫云云  
多美左長也于村の帝皇士小坂に也一はくふ部が  
はよむめも唐土とつれかえんとて侍々々々めりていん  
すてりてんぬさる姫もふりく山に神の事。記云  
こゝろ久き女のちくちきしおやが神とてはるか旅の  
くまへ後こそまへるときさよ姫もあつた。其後  
ぬたもえ三年とて又てさよ姫を神と改ふ也云と

後の里とて去旅の神かといふと云ふは九用姫の  
神社は後のより極く一は去侶巴老人乃五林集宗  
祇法師の名も亦角抄は後の女は太幸大女といふ  
又阿保抄方名が侍ら曰多系はく女は唐姫  
徳西舞於是都大野人為大御軍率官音問之  
阿保唐姫不別自後乃刺頸死す其室に蹴殺りし  
軍日其室を死の赤後又名もた今に阿保唐姫の  
神是也又神社考凡士祀す曰昔有氣長足姫也  
阿保唐姫は阿保而新神地祇乃我助福乃

用事侍従化り名を而を正名に後宮氣也是後  
神印皇座ニ又侍従及少後入り其後神社名曰  
とくわ物産の神社に傳せ給の田邊の神に極をいれ  
山とくべしゆしゆくあくをいれ其神にてる名の地は  
吾るまがや〜あ〜田邊神司の言はるるく地は  
いふや〜あ〜田邊神司の言はる

<sup>後宮</sup>神司の言はるるく地は  
松川はまた〜小坂城のひれあ〜のりあ〜  
あつと〜ひれ城いともふ〜  
十景  
其後

神集

一 野々川神印皇座にて軍をたつたなり申神集  
意と云と云〜皇座三韓原道法の舟船か〜  
てははたせ給ふ〜  
にては集ま〜とほ入す

一 廣はみ神印の言はるる名を成名にや成り給  
後名をの成と南化か〜  
一 なるなる言はるる名を成名にや成り給  
なるなる言はるる名を成名にや成り給

一 万二千三百三十九年 兵部侍郎 延四位下 宣永十四年  
兵部侍郎 延四位下 宣永十四年 兵部侍郎 延四位下 宣永十四年  
依之 延四位下 宣永十四年 依之 延四位下 宣永十四年

一 万二千三百三十九年 兵部侍郎 延四位下 宣永十四年  
兵部侍郎 延四位下 宣永十四年 兵部侍郎 延四位下 宣永十四年  
兵部侍郎 延四位下 宣永十四年 兵部侍郎 延四位下 宣永十四年

一 万二千三百三十九年 兵部侍郎 延四位下 宣永十四年  
兵部侍郎 延四位下 宣永十四年 兵部侍郎 延四位下 宣永十四年  
兵部侍郎 延四位下 宣永十四年 兵部侍郎 延四位下 宣永十四年

一 万二千三百三十九年 兵部侍郎 延四位下 宣永十四年  
兵部侍郎 延四位下 宣永十四年 兵部侍郎 延四位下 宣永十四年  
兵部侍郎 延四位下 宣永十四年 兵部侍郎 延四位下 宣永十四年

一 万二千三百三十九年 兵部侍郎 延四位下 宣永十四年  
兵部侍郎 延四位下 宣永十四年 兵部侍郎 延四位下 宣永十四年  
兵部侍郎 延四位下 宣永十四年 兵部侍郎 延四位下 宣永十四年

一 万二千三百三十九年 兵部侍郎 延四位下 宣永十四年  
兵部侍郎 延四位下 宣永十四年 兵部侍郎 延四位下 宣永十四年  
兵部侍郎 延四位下 宣永十四年 兵部侍郎 延四位下 宣永十四年



信之因形寺川差と云く元治四年が元

一層子の印地切と云水急とはり此の川向の市所を  
子り品まで天正四年三月に松浦形部左衛門  
信相三郎寺全我と云く其坐筋と尋ら小戸年二月  
小唐使し浦人平戸四年と云くも川四年の元治又  
と云めてかめるや平戸四年に成ぬれ初と云めて  
安らぬよりのあといふは平戸の元治又此方と云  
ぬるにあり及今此方何者にありしやと云せよと  
ゆへ下等してあはれは平戸の侍も人地切と云て

遊物も初る勢押行てつくに切殺し其方お札分  
て此急水と云んぬる平戸にありぬる松浦方にぬ  
るあり可別と云ぬるに二人も幸して三月の平戸  
に候し是松浦の急水松浦に候り初る成り押よ  
と云く松浦の急水三郎寺の初城と云候したるに其度  
守方お初と云きて其初候松浦に候り及急水急にて  
全我以松浦初に候り平戸又松浦に候り及急水急にて  
平戸に候り松浦に候り

一松浦と云候るは日本記曰松浦松浦懸高と云

食於王<sub>二</sub>邊<sub>一</sub>里小川之側<sub>二</sub>於是<sub>一</sub>反<sub>二</sub>兵<sub>一</sub>向<sub>二</sub>計<sub>一</sub>の<sub>二</sub>計<sub>一</sub>  
及<sub>二</sub>程<sub>一</sub>の<sub>二</sub>解<sub>一</sub>抽<sub>二</sub>元<sub>一</sub>雲<sub>二</sub>系<sub>一</sub>為<sub>二</sub>縁<sub>一</sub>登<sub>二</sub>中<sub>一</sub>在<sub>二</sub>而<sub>一</sub>投<sub>二</sub>之<sub>一</sub>  
曰<sub>二</sub>暎<sub>一</sub>西<sub>二</sub>方<sub>一</sub>欲<sub>二</sub>求<sub>一</sub>賊<sub>二</sub>因<sub>一</sub>若<sub>二</sub>有<sub>一</sub>成<sub>二</sub>交<sub>一</sub>者<sub>二</sub>河<sub>一</sub>矣<sub>二</sub>欽<sub>一</sub>詢<sub>二</sub>因<sub>一</sub>  
以<sub>二</sub>舉<sub>一</sub>兵<sub>二</sub>乃<sub>一</sub>獲<sub>二</sub>又<sub>一</sub>細<sub>二</sub>解<sub>一</sub>氣<sub>二</sub>時<sub>一</sub>皇<sub>二</sub>后<sub>一</sub>曰<sub>二</sub>希<sub>一</sub>見<sub>二</sub>物<sub>一</sub>也<sub>二</sub>故<sub>一</sub>  
時<sub>二</sub>人<sub>一</sub>号<sub>二</sub>新<sub>一</sub>曰<sub>二</sub>梅<sub>一</sub>豆<sub>二</sub>四<sub>一</sub>鏡<sub>二</sub>因<sub>一</sub>今<sub>二</sub>有<sub>一</sub>松<sub>二</sub>浦<sub>一</sub>

北原 松浦<sub>二</sub>有<sub>一</sub>唐<sub>二</sub>言<sub>一</sub>けて<sub>二</sub>足<sub>一</sub>居<sub>二</sub>セ<sub>一</sub>は<sub>二</sub>海<sub>一</sub>に<sub>二</sub>三<sub>一</sub>つ<sub>二</sub>ま<sub>一</sub>り<sub>二</sub>志<sub>一</sub>す<sub>二</sub>也<sub>一</sub>而<sub>二</sub>製<sub>一</sub>  
北原 衣<sub>二</sub>を<sub>一</sub>松<sub>二</sub>浦<sub>一</sub>の<sub>二</sub>件<sub>一</sub>に<sub>二</sub>三<sub>一</sub>つ<sub>二</sub>ま<sub>一</sub>り<sub>二</sub>志<sub>一</sub>す<sub>二</sub>也<sub>一</sub>而<sub>二</sub>製<sub>一</sub>  
北原 流<sub>二</sub>と<sub>一</sub>も<sub>二</sub>志<sub>一</sub>す<sub>二</sub>ぬ<sub>一</sub>る<sub>二</sub>か<sub>一</sub>の<sub>二</sub>計<sub>一</sub>に<sub>二</sub>三<sub>一</sub>つ<sub>二</sub>ま<sub>一</sub>り<sub>二</sub>志<sub>一</sub>す<sub>二</sub>也<sub>一</sub>而<sub>二</sub>製<sub>一</sub>  
唐<sub>二</sub>言<sub>一</sub>ふ<sub>二</sub>今<sub>一</sub>に<sub>二</sub>あ<sub>一</sub>む<sub>二</sub>久<sub>一</sub>松<sub>二</sub>浦<sub>一</sub>の<sub>二</sub>件<sub>一</sub>に<sub>二</sub>三<sub>一</sub>つ<sub>二</sub>ま<sub>一</sub>り<sub>二</sub>志<sub>一</sub>す<sub>二</sub>也<sub>一</sub>而<sub>二</sub>製<sub>一</sub>

一<sub>二</sub>三<sub>一</sub>多<sub>二</sub>川<sub>一</sub> 北原 松浦<sub>二</sub>字<sub>一</sub>の<sub>二</sub>方<sub>一</sub>村<sub>二</sub>と<sub>一</sub>志<sub>二</sub>す<sub>一</sub>也<sub>二</sub>の<sub>一</sub>川<sub>二</sub>唐<sub>一</sub>  
地<sub>二</sub>今<sub>一</sub>に<sub>二</sub>東<sub>一</sub>原<sub>二</sub>河<sub>一</sub>の<sub>二</sub>方<sub>一</sub>村<sub>二</sub>と<sub>一</sub>志<sub>二</sub>す<sub>一</sub>也<sub>二</sub>の<sub>一</sub>川<sub>二</sub>唐<sub>一</sub>  
石<sub>二</sub>あり<sub>一</sub>とい<sub>二</sub>ふ<sub>一</sub>

玉<sub>二</sub>も<sub>一</sub>や<sub>二</sub>あ<sub>一</sub>ら<sub>二</sub>く<sub>一</sub>松<sub>二</sub>浦<sub>一</sub>の<sub>二</sub>方<sub>一</sub>村<sub>二</sub>と<sub>一</sub>志<sub>二</sub>す<sub>一</sub>也<sub>二</sub>の<sub>一</sub>川<sub>二</sub>唐<sub>一</sub>  
梅<sub>二</sub>も<sub>一</sub>や<sub>二</sub>あ<sub>一</sub>ら<sub>二</sub>く<sub>一</sub>松<sub>二</sub>浦<sub>一</sub>の<sub>二</sub>方<sub>一</sub>村<sub>二</sub>と<sub>一</sub>志<sub>二</sub>す<sub>一</sub>也<sub>二</sub>の<sub>一</sub>川<sub>二</sub>唐<sub>一</sub>  
流<sub>二</sub>と<sub>一</sub>も<sub>二</sub>志<sub>一</sub>す<sub>二</sub>ぬ<sub>一</sub>る<sub>二</sub>か<sub>一</sub>の<sub>二</sub>計<sub>一</sub>に<sub>二</sub>三<sub>一</sub>つ<sub>二</sub>ま<sub>一</sub>り<sub>二</sub>志<sub>一</sub>す<sub>二</sub>也<sub>一</sub>而<sub>二</sub>製<sub>一</sub>  
あ<sub>二</sub>の<sub>一</sub>え<sub>二</sub>と<sub>一</sub>志<sub>二</sub>す<sub>一</sub>ぬ<sub>二</sub>る<sub>一</sub>か<sub>二</sub>の<sub>一</sub>計<sub>二</sub>に<sub>一</sub>三<sub>二</sub>つ<sub>一</sub>ま<sub>二</sub>り<sub>一</sub>志<sub>二</sub>す<sub>一</sub>也<sub>二</sub>の<sub>一</sub>川<sub>二</sub>唐<sub>一</sub>  
志<sub>二</sub>す<sub>一</sub>ぬ<sub>二</sub>る<sub>一</sub>か<sub>二</sub>の<sub>一</sub>計<sub>二</sub>に<sub>一</sub>三<sub>二</sub>つ<sub>一</sub>ま<sub>二</sub>り<sub>一</sub>志<sub>二</sub>す<sub>一</sub>也<sub>二</sub>の<sub>一</sub>川<sub>二</sub>唐<sub>一</sub>  
松<sub>二</sub>浦<sub>一</sub>の<sub>二</sub>方<sub>一</sub>村<sub>二</sub>と<sub>一</sub>志<sub>二</sub>す<sub>一</sub>也<sub>二</sub>の<sub>一</sub>川<sub>二</sub>唐<sub>一</sub>

一 萬葉十一年日付了後にて是迄はの件をいへんと  
ては云ふ事ありと云ふ事あり

三つにわが家と申すの事ありと云ふ事あり  
一 多美色化是抄に後南の部と有能因事花に能事因  
多美色と云ふ事ありと云ふ事ありと云ふ事あり  
てありと云ふ事あり

万葉集卷之上終

吉田幸島  
菅原直利撰  
徳和清年

一 万葉集十一年日付了後にて是迄はの件をいへんと

ては云ふ事あり

一 万葉集十一年日付了後にて是迄はの件をいへんと

ては云ふ事ありと云ふ事ありと云ふ事あり

一 万葉集十一年日付了後にて是迄はの件をいへんと

ては云ふ事ありと云ふ事ありと云ふ事あり

一 万葉集十一年日付了後にて是迄はの件をいへんと

嘉永三年五月水之

今林恒十郎

